

王羲之と「游目」の娛しみ

佐藤 利行

はじめに

王羲之の書翰は、今日までおよそ七百条が伝えられている。⁽¹⁾その中に「游目」(遊目)という語が用いられているものが四条ある。次に挙げる書翰は、その中の一つで益州刺史の周撫に宛てたものである。⁽²⁾

省足下別疏、具彼土山川諸奇。楊雄蜀都、左太冲三都、殊為不備悉。彼故為多奇、益令其游目意足也。

可得果、当告卿求迎。少人足耳。至時示意。遲此期、真以日為歲。想足下鎮彼土、未有動理耳。要欲及卿在彼、登汶嶺戕眉而旋。実不朽之盛事。但言此、心以馳於彼矣。

『右軍』七・『淳化』三・『二王』上
足下の別疏を省るに、彼の土の山川諸奇を具にす。楊雄の「蜀都」、左太冲の「三都」も、殊に備悉ならずと為す。

彼は故より奇多しと為せば、益ます其の游目の意をして足らしめん。果たすを得可くんば、当に卿に告げて迎へを求むべし。少人にて足るのみ。要ず卿の彼に在るに及び、汶嶺・戕眉に登りて旋らんと欲す。実に不朽の盛事な

り。但だ此を言へば、心は以に彼に馳す。

「あなたからの別疏を見ますに、そちらの山川や珍しい産物などが詳しく書かれていました。これではあの楊雄の『蜀都の賦』や左思の『三都の賦』も、十分なものとは言えません。そちらはもとより奇勝が多いので、いよいよこの『目を遊ばせる人』の思いを満足させてくれることでしょう。行けるようになったら、あなたに連絡して迎える者をよこすように頼みます。少しの人数で十分です。その時になったらお知らせします。その日が来るのを、まことに一日が一年のような思いで待つております。思いますに、あなたはそちらを治めてられて、まだ転勤されることもないでしょうが、どうかあなたがそちらにいらつしやる間に、汶嶺・戕眉の山々に登つてきたいものです。このことは本当に『不朽の盛事』というものです。このようなことを口にしただけで、心はもはや彼の地に馳せております」という内容の手紙である。

ここでは、「游目」の語を、「目を遊ばせる人」である羲之みずからを指しており、「山水遊覧を楽しみにしている自分」のことを言う語として用いている。

以下、小論では義之の「游目」の語に着目し、そこに込められた義之の思いや、その語を用いて書翰を送った相手である義之の友人であつた周撫との関わりなどについて考察する。

益州刺史周撫との関わり

周撫は周訪（字は士達）の子である。そもそも周訪は、安南將軍・梁州刺史などを歴任した人物で、王敦も一目置くほどの武人であつた。撫も東晋になつてからは王敦の部下となつて重用された。後に王敦が謀反を起こした時に、撫は敦に従ふことになつたが、後に赦されて司徒王導の従事中郎となつてゐる。このように、周撫は王敦に重用され、王導にも目をかけられるほどに王氏とは深く関わりのあつた人物である。ここで『晋書』卷五十八にある周撫の伝を見てみよう。

撫字道和。強毅有父風、而將御不及。元帝辟為丞相掾。父喪去官。服闋襲爵、除鷹揚將軍、太武昌守。王敦命為從事中郎、與鄧嶽俱為敦爪牙。甘卓遇害、敦以撫為沔北諸軍事、南中郎將、鎮沔中。及敦作逆、撫領二千人從之。敦敗、撫與嶽俱亡走。撫弟光將資遺其兄、而陰欲取嶽。嶽怒曰、「我與伯山同亡。何不先斬我」。會嶽至、撫出門遙謂之曰、「何不速去。今骨肉尚欲相危、況他人乎」。嶽迴船而走、撫遂共入西陽蠻中。蠻酋向羆納之。

初嶽為西陽、欲伐諸蠻。及是諸蠻皆怨、將殺之。羆不聽曰、「鄧府君窮來歸我。我何忍殺之」。由是俱得免。明年、詔原敦党。嶽撫詣闕請罪、有詔禁錮之。

咸和初、司徒王導以撫為從事中郎、出為寧遠將軍、江夏相。蘇峻作逆、率所領從溫嶠討之。峻平、遷監沔北軍事、南中郎將、鎮襄陽。石勒將敦敬率騎攻撫。撫不能守。率所領奔于武昌、坐免官。尋遷振威將軍、豫章太守、後代毋丘奧監巴東諸軍事、益州刺史、假節、將軍如故。尋進征虜將軍、加督寧州諸軍事。

永和初、桓溫征蜀、進撫督梁州之漢中西梓潼陰平四郡軍事、鎮彭模。撫擊破蜀餘寇隗文、鄧定等、斬偽尚書僕射王誓、平南將軍王潤、以功遷平西將軍。隗文、鄧定等復反、立范賢子賁為帝。初、賢為李雄國師、以左道惑百姓、人多事之、賁遂有衆一萬。撫與龍驤將軍朱蕪擊破斬之、以功進爵建城侯。

征西督護蕭敬文作亂、殺征虜將軍楊謹、拋涪城、自号益州牧。桓溫使督護鄧遐助撫討之、不能拔、引退。溫又令梁州刺史司馬勲等會撫伐之。敬文固守、自二月至于八月、乃出降。撫斬之、伝首京師。

升平中、進鎮西將軍。在州三十餘年、興寧三年卒。贈征西將軍、諡曰襄。子楚嗣。

撫、字は道和。強毅にして父の風有るも、而も將御は及ばず。元帝 辟して丞相の掾と為す。父の喪に官

を去る。服闋^やみ爵を襲ひ、鷹揚將軍・太武昌守に除せらる。王敦命じて從事中郎と爲し、鄧嶽と俱に敦の爪牙と爲る。甘卓害に遇ひ、敦は撫を以て沔北諸軍事・南中郎將と爲し、沔中に鎮せしむ。敦の逆を作すに及び、撫は二千人を領して之に従ふ。敦敗れ、撫は嶽と俱に亡走す。撫の弟光は資を將て其の兄に遺して、陰^{ひそ}かに嶽を取らんと欲す。嶽怒りて曰く、「我は伯山と共に亡ばん。何ぞ先づ我を斬らざる」と。会^{たま}たま嶽至り、撫は門を出でて遙かに之に謂ひて曰く、「何ぞ速かに去らざる。今、骨肉すら尚ほ相ひ危ふからんとす、況んや他人をや」と。嶽は船を迴して走げ、撫は遂に共に西陽の蛮中に入る。蛮の酋向羗は之を納る。

初め嶽は西陽を爲め、諸蛮を伐たんと欲す。是に及んで諸蛮は皆な怨み、將に之を殺さんとす。羗は聰^{うん}さずして曰く、「鄧府君は窮し來たりて我に歸す。我何ぞ之を殺すに忍ばん」と。是に由りて俱に免るるを得たり。明年、詔して敦の党を原^{もと}す。嶽・撫は関に詣りて罪を請ふに、詔有りて之を禁錮す。

咸和の初め、司徒王導は撫を以て從事中郎と爲し、出でて寧遠將軍・江夏の相と爲る。蘇峻逆を作すや、領する所を率ゐて温嶠に従ひて之を討つ。峻の平ぐや、監沔北軍事・南中郎將に遷り、襄陽に鎮す。石勒の將郭敬は騎を率ゐて撫を攻む。撫は守る能はず、領する所を率ゐて武昌に奔り、坐して官を免ぜらる。尋いで

振威將軍・豫章の太守に遷り、後に母丘奥に代はり監巴東諸軍事・益州刺史・假節となり、將軍は故の如し。尋いで征虜將軍に進められ、督寧州諸軍事を加へらる。

永和の初め、桓温は蜀を征し、撫を進めて梁州の漢中・巴西・梓潼・陰平四郡軍事を督せしめ、彭模に鎮す。撫は蜀の餘寇隗文・鄧定等を擊破し、偽尚書僕射の王誓・平南將軍の王潤を斬り、功を以て平西將軍に遷る。隗文・鄧定等は復た反し、范賢の子賁を立てて帝と爲す。初め、賢は李雄の國師と爲り、左道を以て百姓を惑はし、人多く之に事ふ。賁遂に衆一萬有り。撫は龍驤將軍朱熈と擊破して之を斬り、功を以て爵を建城侯公に進めらる。

征西督護の蕭敬文乱を爲し、征虜將軍の楊謹を殺し、涪城に拠りて、自ら益州の牧と号す。桓温は督護の鄧遐をして撫を助けて之を討たしむるも、抜くこと能はずして、引退す。温は又た梁州刺史の司馬勲等をして撫に会して之を伐たしむ。敬文は固く守り、二月より八月に至るも、乃ち出でて降る。撫は之を斬り、首を京師に伝ふ。

升平中、鎮西將軍に進めらる。州に在ること三十餘年、興寧三年卒す。征西將軍を贈られ、諡して襄と曰ふ。子の楚嗣ぐ。

ここに「敦の逆を作すに及び、撫は二千人を領して之に従ふ。敦敗れ、撫は嶽と俱に亡走す」とあるのは、『晋

書』卷六「明帝紀」の次の記述をいう。

（太寧二年）秋七月壬申朔、敦遣其兄含及錢鳳、周撫、鄧岳等水陸五萬、至于南岸。溫嶠移屯水北、燒朱雀桁、以挫其鋒。帝躬率六軍、出次南皇堂。至癸酉夜、募壯士、遣將軍段秀、中軍司馬曹渾、左衛參軍陳嵩、鍾寅等。甲卒千人渡水、掩其未畢。平旦戰于越城、大破之、斬其前鋒將何康。王敦噴惋而死。秋七月壬申朔、敦は其の兄の含及び錢鳳・周撫・鄧岳ら水陸五萬をして、南岸に至らしむ。溫嶠は屯を水北に移し、朱雀桁を燒き、以て其の鋒を挫く。帝は躬ら六軍を率ゐ、出でて南皇堂に次る。癸酉の夜に至りて、壯士を募り、將軍段秀・中軍司馬曹渾・左衛參軍陳嵩・鍾寅らを遣はす。甲卒千人 水を渡り、其の未だ畢らざるを掩ふ。平旦に越城に戰ひて、大いに之を破り、其の前鋒將何康を斬る。王敦は噴惋して死す。

また、「石勒の將郭敬は騎を率ゐて撫を攻む。撫は守る能はず、領する所を率ゐて武昌に奔り、坐して官を免ぜらる」と見えるが、これは『晋書』卷七「成帝紀」に、

（咸和五年）秋八月、石勒僭即皇帝位、使其將郭敬寇襄陽。南中郎將周撫退歸武昌。

秋八月、石勒僭して皇帝の位に即き、其の將郭敬をして襄陽に寇せしむ。南中郎將周撫は退きて武昌に帰

る。

とある記述と一致する。

また、周撫の本伝に「永和の初め、桓温は蜀を征し、撫を進めて梁州の漢中・巴西・梓潼・陰平四郡軍事を督せしめ、彭模に鎮す。撫は蜀の餘寇隗文・鄧定等を擊破し、偽尚書僕射の王誓・平南將軍の王潤を斬り、功を以て平西將軍に遷る」とあるのは、『晋書』卷八「穆帝紀」に、

（永和二年）十一月辛未、安西將軍桓温帥征虜將軍周撫、輔國將軍譙王無忌、建武將軍袁喬、伐蜀、扞表輒行。

十一月辛未、安西將軍桓温は征虜將軍周撫・輔國將軍譙王無忌・建武將軍袁喬を帥ゐて、蜀を伐ち、扞表して輒ち行く。

とあることをいう。

以上のように、『晋書』本伝および帝紀に見られる記述からは、王羲之と周撫との直接的な関わりを見ることができない。しかし、先にも述べたように、周撫は王敦に重用され、王導にも目をかけられるほどに王氏とは深く関わった人物であり、当然のことながら羲之とも関わりがあったに違いないと思われる。

ところで二人が亡くなった年、すなわち升平五年（三六一）に義之から周撫に宛てたと思われる次のような書翰がある。

足下今年、政七十耶。知體氣常佳。此大慶也。想復勲加頤養。吾年垂耳順。推之人理、得爾以為厚幸。但恐前路軫欲逼耳。以爾、要欲一遊目汶嶺。非復常言。足下但當保護以俟此期。勿謂虛言。得果此緣、一段奇事也。

（『淳化』四・『二王』上）

足下は今年、政に七十なる耶。體氣の常に佳なるを知る。此れ大慶なり。復た勲に頤養を加へんことを想ふ。吾は年耳順に垂んとす。之を人理に推すに、爾を得たるは以て厚幸と為す。但だ前路の軫た逼らんと欲るを恐れるのみ。爾るを以て、一たび汶嶺に遊目せんと要欲す。復た常言に非ず。足下は但だ当に保護して、以て此の期を俟つべし。虚言と謂ふこと勿かれ。此の縁を果たすを得ば、一段の奇事なり。

すなわち、「あなたは今年、ちょうど七十になられるのです。いつもお元気だということなので、たいへん喜んでおります。どうか更に十分に養生して下さい。私も耳順の年になろうとしております。人の世の道理からして、この年まで生きられたのとても幸せなことと思います。ただ、行くさきが次第に迫っていることが気がかりでなりません。というわけで、ぜひ一度、汶嶺へ遊びに行きたいと思います。口先

だけのことではありません。あなたはお体を大切に、その時期が来るのを楽しみに待っていて下さい。嘘言だと思つてはいけません。この事が果たせたならば、すばらしいことです」という内容のものである。

この時、義之は五十九歳、周撫は七十歳。書翰の中にも「之を人理に推すに」すなわち、人間の寿命から言えば、ともに長生きをしたことになるという。老い先の短いことを気に掛けながら義之は、周撫のいる蜀に出かけ汶嶺に登つてみたいという願いを懐いていたのであるが、結局この願いは叶えられることなく二人ともに此の年に世を去つてしまう。

義之よりも十一歳年上の周撫は、乱世の時代にあつて真に心を許すことのできる友人であつたことが、これらの書翰から分かるのではなからうか。

「游目」の娛しみ

そもそも「游目」の語は、古くは『楚辞』離騷に、

忽反顧以遊目兮、將往觀乎四荒。

忽ち反顧して以て目を遊ばしめ、將に往きて四荒を觀んとす。

と見えている。すなわち「游目」とは、氣の向くままに近くから遠くを見回す、ということである。この語は、次に挙げるように後漢・班固の「西都賦」（『文選』卷一）にも、

神明鬱其特起、遂偃蹇而上躋、軼雲雨於太半、虹霓迴帶於禁楯。雖輕迅與儼狡、猶愕眙而不能階。攀井幹而未半、目眴眴而意迷、含櫺檻而卻倚、若顛墜而復稽、魂恍恍以失度、巡迴塗而下低。既懲懼於登望、降周流以徬徨、步甬道以縈紆、又杳窅而不見陽。排飛闥而上出、若遊目於天表、似無依而洋洋。

神明鬱として其れ特り起ち、遂に偃蹇として上躋し、雲雨を太半に軼^すしめ、虹霓^{ふんひ}禁楯^{ふんび}に迴帶^{くわい}す。輕迅と儼狡^{げんけう}と雖も、猶ほ愕眙^{がくち}として階^{のぼ}ること能はず。井幹を攀^かぢて未だ半ばならざるに、目眴^{げんてん}眴として意は迷ひ、櫺檻^{れいけん}を舍てて卻^{かへ}き倚^より、顛墜^{てんてい}するが若くにして復た稽^{かへ}り、魂恍^{くわん}恍として以て度を失ひ、迴塗を巡りて下低す。既に登望に懲懼^{けいこ}し、降りて周流して以て徬徨^{ほうかう}し、甬道を歩して以て縈紆^{えうこ}し、又た杳窅^{えうてう}として陽を見ず。飛闥^{ひえい}を排^{おし}いて上り出づれば、目を天表に遊ばしむる若く、依る無くして洋洋たるに似たり。

と見えている。これは未央宮から建章宮に通ずる道路および建章宮の様子について述べた箇所であるが、その中で「目を天表に遊ばしむる若く、依る無くして洋洋たるに似たり」と、「遊目」の語が用いられている。ここでは『楚辞』離騷を踏まえて遠くを見るかす意に此の語を用いている。当然のことながら李善注には、先に挙げた『楚辞』離騷を引いている。

ところで「遊目」の語は、王羲之の「蘭亭序」にも用いられ

ている。ここで「蘭亭序」を見てみよう。

永和九年、歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。修禊事也。羣賢畢至、少長咸集。此地有崇山峻嶺、茂林脩竹、又有清流激湍、映帶左右。引以為流觴曲水、列坐其次。雖無糸竹管弦之盛、一觴一詠、亦足以暢叙幽情。

是日也、天朗氣清、惠風和暢。仰觀宇宙之大、俯察品類之盛。所以游目騁懷、足以極視聽之娛、信可樂也。

夫人之相與、俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之內、或因寄所託、放浪形骸之外。雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足、不知老之將至。及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣。向之所欣、俯仰之間、已為陳跡、猶不能不以之興懷。況修短隨化、終期於尽。

古人云、「死生亦大矣。」豈不痛哉。每覽昔人興感之由、若合一契。未嘗不臨文嗟悼、不能喻之於懷。固知、一死生為虛誕、齊彭殤為妄作。

後之視今、亦猶今之視昔。悲夫。故列叙時人、錄其所述。雖世殊事異、所以興懷、其致一也。後之覽者、亦將有感於斯文。

永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽・山陰の蘭亭に会す。禊事を修むるなり。羣賢畢^{しうけん}く至り、少

長咸みな集ふ。此の地に崇山峻嶺、茂林脩竹有り、又た清流激湍の、左右に映帶する有り。引きて以て流觴の曲水と爲し、其の次に列坐す。糸竹管弦の盛んなる無しと雖も、一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足る。

是の日や、天朗らかに氣清み、惠風和暢す。仰ぎて宇宙の大なるを觀、俯して品類の盛んなるを察す。目を遊ばしめ懷おもひを騁する所以にして、以て視聽の娛しみを極むるに足り、信に樂しむ可きなり。

夫れ人の相ひ與に、一世に俯仰するや、或いは諸を懷抱に取り、一室の内に悟言し、或いは託する所に寄するに因りて、形骸の外に放浪す。趣くと舍まると萬に殊なり、静と躁と同じからずと雖も、其の遇ふ所を欣び、暫く己に得るに当たりては、快然として自ら足り、老の將に至らんとするを知らず。其の之く所の既に倦み、情は事に随ひて遷るに及んでは、感慨之に係る。向の欣ぶ所は、俯仰の間に、已に陳跡と爲り、猶ほ之を以て懷おもひを興さざる能はず。況んや修と短と化に随ひ、終に尽くるに期するをや。

古人云ふ、「死生は亦た大なり」と。豈に痛まざらんや。昔人感を興すの由を覽る毎に、一契を合するが若し。未だ嘗て文に臨みて嗟き悼まずんばあらざるも、之を懷おもひに喩る能はず。固に知る、死と生を一とするは虚誕た爲り、彭と殤を齊ひとしくするは妄作たを爲る。

後の今を視るや、亦た猶ほ今の昔を視るがごとからん。悲しい夫。故に時人を列叙して、其の述ぶる所を録す。世

は殊なり事は異なると雖も、懷おもひを興す所以は、其の致は一なり。後の覽る者、亦た將に斯の文に感あらんとす。

第二段落到「游目」の語が見えている。この段の内容は「この日は、天は朗らかに晴れわたり空氣は澄みきつて、春風がおだやかに吹きわたつた。仰いでは限らない宇宙の大なるを觀、俯しては盛んなる万物を見る。かくして目を遊ばせ、懷おもひを騁せ、目や耳を十分に娛しませることができ、本当に楽しいことである」というものである。思いにまかせて自由に目に映るものを眺め、耳に入るものを聞く、これこそが義之の求めるものであった。

『晋書』王羲之伝には、次のようにある。

羲之雅好服食養生、不樂在京師。初渡浙江、便有終焉之志。会稽有佳山水、名士多居之。謝安未仕時、亦居焉。孫綽・李充・許詢・支遁等、皆以文義冠世。並築室東土、与羲之同好。嘗与同志、宴集於会稽山陰之蘭亭、羲之自爲之序、以申其志。

羲之は雅より服食養生を好みて、京師に在るを樂しまず。初め浙江を渡るに、便ち終焉の志有り。会稽に佳き山水有り、名士は多く之に居む。謝安の未だ仕へざりし時、亦た焉に居む。孫綽・李充・許詢・支遁ら、皆な文義を以て世に冠たり。並びに室を東土に築き、義之と好みを同じくす。嘗て同志と会稽・山陰の蘭亭に宴集し、羲之は自ら之が序を爲りて、以て其の志を

の
申ぶ。

義之はもともと服食養生を好んでおり、⁽³⁾ 浙江を渡つて会稽に来てからは、その地で一生を終えるつもりであつたという。そこで孫綽・李充・許詢・支遁ら義之と好みを同じくする人たちと会稽郡山陰県の蘭亭に宴集し、みづから序を作つたのである。

この序文からは、義之の抱いていた思想を読み取ることが出来る。特に生死の問題に関する義之の思いは、今生きているこの時が全てなのであつて、死後のことをあれこれを考えても仕方のないことである、というものであつた。そのためには、目の前に広がる自然の美しさを十分に楽しむことが重要であると義之は考えていたので、はなかるうか。「目を遊ばしめ懐^{おも}ひを聘^はする所以にして、以て視聴の娛しみを極むるに足り、信^{まこと}に楽しむ可きなり」に、義之のそのような思いが込められているように思われる。

ところで、西晋の潘岳は妻の父である楊肇（字は季初）のために「楊荊州誄」（『文選』巻五十六）を作っているが、その中で肇が敗戦によつて国に帰つた後のことを述べる段に次のようにある。

退守丘壑、杜門不出。游目典墳、縱心儒術。

退きて丘壑を守り、門を杜^とぢて出でず。目を典墳に游

ばしめ、心を儒術に^{ほしいまま}縦にす。

これに拠れば、「游目」の語は、ひたすら読書に没頭することを表現するために用いられているようである。「游目」は、ただ自然の景物を眺め楽しむというのではなく、自然の事物以外の物であつても、それを心の趣くままに眺め見るという意味でも用いられている。

また、劉宋の傅亮の「感物賦」（『全宋文』巻二十六）では、その序において、

夜清務隙、遊目藝苑。

夜は清く務めに隙あれば、目を藝苑に遊ばしむ。

とあつて、これも潘岳の用例と近いものである。このように「游目」とは、ただ単に事物を眺めるというのではなく、そこには何からも強制されない自由な心からの行為であることが此の語を用いる前提であるように思われる。

おわりに

先に王羲之からの周撫宛ての二条の書翰に、「游目」の用例があることを紹介したが、この他の用例としては以下の二条がある。

知彼清晏歳豊。又所使有無一郷、故是名處。且山川

形勢乃爾。何可以不遊目。〔淳化〕四・〔二王〕上

彼の清晏にして歳の豊かなるを知る。又た一無きを有らしむるの所の郷にして、故より是れ名處なり。且つ山川の形勢は乃ち爾り。何ぞ以て遊目せざる可けんや。

「彼の地が平安で実り豊かなことを知りました。また、無き有にしてくれる所で、もとよりこれは天下の名所です。その上、山川の形勢もすばらしく、どうして遊覧せずにおれましょうか」という内容のこの書翰は、やはり益州刺史であった周撫に宛てたものと思われる。

次の書翰も、或いは周撫宛てのものであろうか。

頃猶小差。欲極遊目之娛、而吏卒守之。可歎耳。陽花

果似小可。何日得卿諸人共賞。〔右軍〕三三二

頃ろ猶ほ小しく差ゆ。遊目の娛しみを極めんと欲するも、而も吏卒之を守る。歎く可きのみ。陽花は果たして小しく可なるが似し。何れの日にか卿ら諸人と共に賞するを得ん。

「近ごろ少しはよくなりました。遊びに出かけたいのですが、吏卒が護衛しております。まことに残念です。陽花は果たしてだぶ咲いているようです。何日になったらあなたの方と見に行くことができるのでしょうか」というものであるが、これらの二つの書翰に見える「遊目」は、いずれも遊覧に出かける、というものである。

ところで羲之の息子である王献之の逸話が『世説新語』言語篇に伝えられている。

王子敬云、従山陰道上行。山川自相映發、使人応接不暇。若秋冬之際、尤難為懷。

王子敬云ふ、「山陰道上より行けば、山川自ら相ひ映發し、人をして応接に暇あらざらしむ。秋冬の際の若きは、尤も懷を為し難し」と。

王羲之が蘭亭の宴を開催した会稽郡山陰県あたりの風景は、まさにこのような美しいものであった。こうした自然の美しさに「目を遊ばせる娛しみ」こそが、今その時を大切に生きようとした羲之の願いであつたに違いない。

注

(1) 森野繁夫・佐藤利行『王羲之全書翰』（白帝社）を参照。

(2) テキストとして使用したのは、唐・張彦遠輯『右軍書記』（津逮秘書本『法書要録』所収）、清・乾隆三十四年勅輯『淳化閣帖』（広雅書局刊『武英殿聚珍版』所収）、宋・許開撰『二王帖評釈』（『横山草堂叢書』所収）である。『右軍書記』については、宋・朱長文『墨池編』（康熙五十三年裔孫之勳就間堂刊本）所収のものと、明・王世貞『王氏書苑』（民国十一年上海泰東圖書局用原刻本景印）所収のものを参照した。

(3) 佐藤利行「王羲之と五石散」『広島大学大学院文学研究
科論集』第六十五卷